

(様式1)

「未来の担い手育成プログラム研究指定校」実績報告書(3年次)

1 学校名等

学 校 名	京丹後市立弥栄中学校				校長名	関 利彦
研 究 主 題	課題解決学習をとおして深い学びにつながる授業展開と仲間と協働し自己肯定感を高め、未来を拓く力を付ける。					
研究の目的	課題解決学習をとおして、生徒の自己肯定感を高め、未来を拓く力を付ける。					
学 年	1年	2年	3年	特別支援	合 計	教職員数 ※校長・教頭を含む
学 級 数	1	2	2	1	6	17
児童生徒数	31	42	40	5	118	

2 研究校の概要

(1) 本校生徒の実態と研究課題

全体として与えられた課題に取り組むことや、指示を聞いて活動することができるが、一方で自分の思いや考えを他者に伝えることや他者と異なる意見を述べることにも抵抗感が見られる。そこで、全教育課程を通じて「他者の意見を踏まえ、自分の意見を持ち、発信する力を身に付ける」ことを目標として研究を進めてきた。

(2) 研究体制

研究主任を中心とした「未来の担い手育成プログラム」研究会議を中心として研究活動を進めてきた。また、課題解決型の学習を意識した授業改善の取組については研究主任、学習指導部主任を中心に全教職員で取組を進めた。

「未来の担い手育成プログラム」研究会議構成メンバー

研究主任、学習指導部主任、教務主任、 学年主任、校長、教頭

3 主な研究活動

(1) 年度当初の研究活動の方向性の確認(4月)

①2学年の総合的な学習の時間におけるPBLの取組、②新学習指導要領の内容をふまえた授業改善を2本柱とした研究の方向性と概要の確認を行った。

(2) 課題解決型の学習につながる授業改善

ア 今年度施行の学習指導要領に基づく授業改善についての確認(4月)

イ 授業担当全教職員による各学期1つ以上の単元パッケージ作成による指導力の向上

ウ 京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会における公開授業(11月17日)

1年生の国語では、「不便さのもつ価値」について多面的・多角的に考察することを通じて、自己と他者のもつ価値観の相違に気づくことができる課題解決型の学習を行った。

2年B組の社会では、近代(前半)の日本と世界について、よりよい社会の実現を視野に、そこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする課題解決型の学習を行った。事後研究会において、参観していただいた先生方からアドバイスをいただき、今後の改善に生かした。

(3) 課題解決型の学習をいかした総合的な学習の時間

- ア 京丹後市内外の観光についての情報収集
- イ 京丹後市の観光における課題の分析
- ウ 各グループのテーマ、ターゲット設定
- エ 講話学習
- オ 京丹後市内の観光地、丹後王国の現地調査
- カ 各学級でのパネルディスカッション



京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会において、パネルディスカッションを公開し、その発表や交流内容に対してコーディネーターからアドバイスをいただいた。

キ 校内発表会における各班の発表

各班で研究した成果について1、2年生を対象に発表した。2年生は自分たちが探究したことを堂々と他者に発信し、聞いてもらうことで自信をもつことができた。1年生にとっては2年生の学びを目の当たりにし、来年度への展望を持つ機会となった。



(4) きょうと明日へのチャレンジコンテスト

2月19日に「第2回きょうと明日へのチャレンジコンテスト」に参加し、2年生B組4班が発表を行った。校内発表会で参加者からいただいたアドバイスをもとに、さらに自分たちの発表の内容を深めた。これまで以上に、相手にわかりやすく、思いが伝わるような発表を心がけた。当日は他校の生徒の研究成果を聴き、自分たちの発表の良いところや研究に不足していたところなど、新たな気づきを得ることができた。また、多くの方々に講評をいただくことで、今後の研究における新たな視点が得られ、さらなる深い学びにつながるよい機会となった。



(5) 1年生「総合的な学習の時間」発表会

講話を聴く、現地調査を行うなどのふるさと探究活動を通して学んだこと、考えたことを壁新聞にまとめ、グループで発表を行った。2年生の学習内容につながるよう、活動を通して課題について調査する、考えてまとめるなどの力を身に付けることができた。

(6) 3年生「立志式」

1、2年生での学びを活かしつつ、高校説明会や講話学習の内容を参考にして自らの生き方について考え、ライフ・プランニングを行った。「立志式」において「夢に向かって」をテーマに自分の生き方についての発表を行った。その感想の中には「2年生時のPBLの活動を通じて京丹後市のよさに気づき、将来は地元に戻って京丹後市に貢献したい」という意見もあり、地域のことを知り、その発展に尽力したいという思いが芽生えたことを確認することができた。



4 今年度の研究の成果と検証

(1) 生徒の変容

- ・自分の思いを伝えることや他者に批判されることを敬遠する傾向にあった生徒たちであるが、グループで意見を交流する経験をとおして、時には他者と意見が対立することもあるが、そのことによってよりよい解決策が見出されることもあるという認識をもつことができるようになった。
- ・自分たちの考えた解決策を発信する機会が多く得られたことで、次第によりよいものを作り上げ、他者に伝えることに対する自信と喜びを感じるようになった。特に後輩に研究の成果を伝える機会をもつことで、生徒の自己肯定感を高めることができた。
- ・グループで試行錯誤をしながら課題を解決するという経験が、教科授業での討論活動の活性化や3学期の放課後ドリル時間の教え合い学習における充実した学びにつながった。

《令和3年度弥栄学園生徒アンケート一部抜粋（弥栄中学校）》

アンケート項目	肯定的解答
・授業中、友達と話し合い学習をよく行っている。	92%（R2：90%、R元：91%）
・友達と話し合うとき、友達の意見を最後まで聞くことができる。	94%（R2：92%、R元：96%）
・自分にはよいところがあると思う。	75%（R2：68%、R元：62%）
・友達の前で自分の考えや意見を発表するのに慣れた。	66%（R2：71%、R元：43%）

(2) 教員の意識の変容

- ・年度当初から、PBLの取組で習得した手法を各教科の授業に取り入れ、全教育課程において課題解決型の学習に取り組むことを明確にしたことで、新学習指導要領に即した授業改善を進めることができた。単元パッケージや授業の構成をこれまで以上に丁寧に組み立て、グループワークや自分の考えをまとめる時間を意図的に設定することができるようになった。
- ・1学年の教員は次年度を意識し、3学年の教員は前年度の学びを活かすことを意識して総合的な学習の時間を活用する中で、これまで以上に3年間を見通した計画、実践を行うことができるようになった。

5 今年度の課題

(1) 全教育課程を通じた課題解決型の学習の実施に向けた教員研修

各教科の授業においても課題解決型の学習に取り組んだが、学校内や学園単位での授業研究会を十分にもつことができず、教員間で情報を共有し学び合える機会をさらに充実させる必要がある。課題解決的な授業を教育活動全体の中でどのようにバランスよく組み込むことができるのか、研鑽を積み重ねることが重要である。

(2) 生徒の学びの検証

生徒の認知能力、非認知能力の伸びを継続的に測ることができるような基準の設定が必要である。認知能力については従来の定期考査や単元テスト、または成績には加味しない毎年同じ設問で行うテストを用いて定着度を測定する。非認知能力についてはルーブリックを作成し、ポートフォリオなどを用いてその成果について検証する。

(3) 論理的な思考力の育成

今年度の発表を通じて、データから読み取れることをしっかりと分析し、論理的思考によって仮説を導き出す過程において、自分たちの論に都合のよいデータを活かすのではなく、常にデータや事実に基づいて論理的に思考することが重要である。そのような論理的思考を習慣化させることを授業の中で繰り返すことにより、実生活において物事を論理的に考える習慣を身に付けさせたい。

6 事業終了後の研究構想

(1) PBLの手法を用いた教科授業

PBLを通して収集した情報から課題を分析し、仮説を立て、検証し、また練り直すという課題を解決するための一定のサイクルが身に付いてきた。しかし、総合的な学習の時間では、多くの時間をかけて取り組むことはできるが、これを各教科の授業の中にそのまま取り入れることは更に研究の余地がある。各教科の授業に合わせてこの過程を改良し、生徒に常に課題意識をもたせながら授業を展開する。

(2) 地域との連携の強化

総合的な学習の時間を軸にして、地域の実態に合わせた課題解決学習を全学年に取り入れる。この3年間は指定を受けたことにより、地元の企業である(株)丹後王国ブルワリー様の支援をいただくことができた。今後は学校運営協議会など、地域との連携を強めることで、様々な形で生徒に自分たちの住む街に貢献する体験を積ませたい。そのことにより、故郷を愛する心を育み、社会貢献への意識を涵養する。

(3) 教員の継続したPBLに関する研修

各教科における課題解決型の学習や評価など、新学習指導要領に対応した授業実践について継続して学び合う機会を設ける。校内、学園内での公開授業や事前、事後研究会を設定するとともに、先進的な研究を進めている学校や教育委員会などの指導助言をいただく。